

《書 評》

小林一美著 汲古書院

『中華世界の国家と民衆』 上・下巻

(愛知大学) 馬場 毅

力作である。収録された多くの論文が問題提起的であり、いろいろと中国史について考えさせる。

本書は修士論文をもとにした上巻の第1章論文から、最近の論文まで収録されて、小林氏の中国史学が、その時代による問題関心の変遷も含めて、一望できるようになっている。全体の構成を示すと以下のようにになっている。

序文

上巻 第1部 中国史における民衆とその運動

第1章 太平天国前夜の農民闘争—揚子江下流デルタ地域における—

第2章 19世紀における中国農民闘争の諸段階

第3章 中国半植民地化の経済過程と民衆の闘い—厘金(釐金)をめぐる、19世紀後半—
第4章 抗租・抗糧闘争の彼方—下層生活者の想いと政治的・宗教的自立の途—

第5章 (1) 嘉慶白蓮教反乱の性格 (2) 嘉慶白蓮教反乱の軌跡—斉王氏の反乱—

第6章 清代の宗教反乱

第7章 叛逆の女首領となった女性たち

第8章 中華帝王を夢想する叛逆者たち—中国における帝王幻想(ユートピア)の磁場—

第9章 中国農民戦争史論の再検討

附録

下巻 第2部 中国史における社会と文化

第1章 中華世界の構造と難民・移住民・華僑—福建省(閩)を中心として—

第2章 中華世界と封建制日本—家産宗族制度からみた国家・社会の比較—

第3章 中華帝国と秘密結社—中国になぜ多種多様の宗教結社や秘密結社が成長、発展した

か—

第4章 家産均分相続の文化と中国農村社会

第5章 日本と中国の国家・社会・文化の比較史的考察—両国の民衆運動、民衆意識を比較して思う—

第6章 The Character of Land Management and Commercial and Business Operations in Modern North China / 近代華北的土地経営与商業運行的特徴

第3部 中国史における国家と権力

第1章 中華世界における「華・夷」関係の歴史的展開

第2章 魏晋南北朝時代の国家・共同体史論—隋唐世界帝国形成に関する理論的考察—

第3章 「アジア的国家・共同体」の解体過程—滝村隆一の国家論によせて—

第4章 朱元璋の恐怖政治と「皇帝革命」概念—中華世界帝国における専制君主の歴史的位相—

第5章 中国史における国家と民族—中華帝国の構造とその展開によせて—

第6章 中国社会主义政権の出発—「鎮圧反革命運動」の地平—

第7章 中国における地方官「知県・県長・県書記」の実態とその権力の変遷—明清時代・中華民国時代・中華人民共和国の3時代における—

第8章 新しい比較史論・文化文明史論及びアジア的国家の世界史的展開—日中両国の歴史と運命の相違をめぐる—

附録 跋文

本書は、上・下巻あわせて本文だけで千頁を超す大部なものである。紙幅の関係もありここでは各章の内容の詳しい紹介を省略して、以下のいくつかの問題について紹介と意見を述べ、書評の責を果たしたい。

民衆運動論

小林氏は白蓮教反乱や、義和団運動などの教門を中心にして研究され、古代の民衆運動についてもふれられている。この面での小林氏の業績は、ベトナム反戦運動や全共闘運動が高揚した時期に書かれた上巻第4章が最初のものであるが、抗租・抗糧運動などの経済闘争の単純な延長には、政治的・宗教的な反乱は起こらないという指摘や、さらにこれらの反乱に参加した主体は在地の土地で耕作している農民よりも、各地を放浪している無産農民であり、幻想の中で祖先墳墓の地を奪回するミロクの世、太平の世を望んだとしている指摘は、民衆反乱史研究の一時期を画した。

その後中国が、文革の破産や改革開放へ踏み切った階級闘争重視から経済発展重視に転換し、また毛沢東時代に比べて外部へ情報が公開され、中国革命像が急速に色あせる中で、小林氏は中国革命をモデルにして、農民運動、民衆運動を評価する視点から離脱し、歴史分析の方法論としても、マルクス主義的方法論、特に階級闘争をもって歴史分析をすることから離脱していった。

特に嘉慶白蓮教反乱を中心とした一連の白蓮教結社の反乱の分析では、文化人類学的方法、社会史的方法などを駆使して、独自の意義を位置付ける作業をしている（特に上巻第5章）。そして嘉慶白蓮教反乱では「社会浮遊者、劣者、負者が全体制と体制的価値総てを『始源的なるもの』『混沌なるもの』に解体し、それを無力化する先駆けとなる」（上巻273頁～274頁）としているのは卓見である。その他に被差別階層の出身で、各地を流浪し、民衆の裏の生活を知っている女性の多くが、民衆の中にある女性は魔術的威力があるという信仰とあいまって、聖性をおびて一般信徒から仰ぎ見られ、リーダーとして活躍したことについて（代表的な例は齊王氏が総教師となり襄陽の教軍を率いて清軍や郷勇と戦った）、なぜ彼らが仰ぎ見られるようになるのかということを文化人類

学的方法を用いた心理的分析も含めて示されているのも小林氏の研究の功績である。

ところで小林氏は、官側の軍隊が民衆に対して略奪、連行、殺人を行っただけではなく、白蓮教徒側も、略奪、連行、殺人を行っただけをあげており、反乱の実相を極めてリアルに描いている。（例えば第5章(2)）。また白蓮教を含め古代から中華人民共和国時代までの多くの民衆反乱において貧しい民衆にとっての理想の世とは、自ら真命天子として皇帝を名乗るか、あるいは自称皇帝にしたがって新王朝の樹立を目指して、富貴を実現しようとする（皇権主義）極めて現実的なものであり、そこには専制主義を越える契機はないと喝破している（上巻第8章）。総じて、従来の階級闘争史観で見落とされていたもの、あるいは正面から扱われなかった民衆闘争のマイナス面もとりあげている。

専制国家論について

このテーマに関連して、中華帝国における伝統的な専制皇帝という政治的磁場における朱元璋の恐怖政治の確立過程と、建国以後の毛沢東政治のアナロジーの試みが注目される。小林氏は両者に通じる「皇帝革命」という概念を用いて説明するが、これは「権力を掌握して貧富の差を無くさんとする人々の願望と闘争の中から生まれ、皇帝となりえた唯一の独裁者が行う貧者のための『革命』」（下巻292頁）と概念化して、朱元璋の場合は、中華帝国の皇帝として経済的先進地帯である長江中下流域から財富を収奪し、帝国の周辺の開発や防衛につぎこみ、帝国内の地域を平均化する「革命皇帝」であり、一方紅巾の乱に参加した農民たちの平均主義は、土地、租税、徭役の平均化であるが、後者から前者に朱元璋の平均主義が転化する過程で、恐怖政治を行いながら功臣、江南を含む地方地主の処刑と土地没収を行い官田を拡大し、大規模で強制的な人口移動を行ったとし、

毛沢東の農業社会主義は、地主や富農からの土地没収と貧農への分配、上海などの先進地帯からの財富の収奪と他の地域への分配、人口の他の地域（農村や辺境）への移動という平均化が行われたとする（下巻第3部第4章）。これらは革命や反乱で政権を握った中華世界の為政者の政治的磁場を考える上で大変鋭い指摘であると思うが、毛沢東については、小林氏も指摘している米ソの挟撃のほかに、土地革命や農業集団化、プロレタリア独裁を採用した党と国家のあり方など社会主義化の過程でのソ連モデルの影響など、明代と異なった当該時期の国際的影響などについて具体的な分析を加えるべきであろう。

その他に中国史における民族問題に関連して、現在の中国の歴史家が、歴史上漢民族を主体民族としている点は、漢民族中心に国家統合を進めている現政権の方針を歴史上に投影するものであり、事実に合わないと批判している。この点については私も賛成である。小林氏はさらに中国史に照らして論を進めて、「中国専制王朝が民族の枠を越えた世界主義、普通（遍）主義の理念を獲得して世界帝国へと飛翔するためには、モンゴル高原、中央アジア、満州といった外地＝周辺＝辺境を征服し、そこから自己と異なった人種、技術、文化、宗教、生産様式を導入するか、或はそこから抬頭した政治勢力に支配されるか、この二つの道しかなかった」（下巻334頁）とし、前者の例として秦・漢帝国、後者の例として五胡の漢族への融合、特に鮮卑族の主導による隋・唐帝国、さらに元帝国、大清帝国をあげている。私も胡漢民族の対立をある程度抑制した世界帝国としての清の統治システムはもっと見直されるべきだと思う。

封建制について

唯物史観の発展段階論を中国に適用しようという試みは、戦後日本の中国史研究者に一時大きな影響を与えた。小林氏も中国史における地主一佃

戸の關係に西欧をモデルにした封建的な農奴制を適用することに最初は積極的であったが、後になると否定的になった。

そのことと関連して、小林氏は後に均分相続に注目し、それにより地主層の多くが数代で零細農民に零落してしまい、地主は「階級」として成立しにくい、特殊な「階級」として考えるべきであり、宋代以後、地主の一部が権力を手に入れて財産を作り上げようとし、科挙に応募し官僚となり、その権力で郷紳地主、土豪劣紳となったとし（下巻第2部第4章）、さらに草野靖氏の見解に依拠しながら、宋代、官戸形成戸といえども「王朝権力による恩寵と保護により個別的に特権にあずかるものにすぎず、西欧や日本のような中世領主階級や貴族階級とは全く異なる存在であった。」（下巻60頁）とし、さらに封建制が成立した西欧や日本では、長子相続制・限嗣相続制によって領主層の封土の細分化を防ぎ、さらに身分制度によって農民と分けたとしている（下巻第2部第2章）。

また日本の封建制を、以前のマルクス主義史学による否定的評価と異なり、中国などのアジア国家、専制国家と比較して積極的な評価をしている。すなわち封建制の江戸時代、武士は、2、3年で任期が変わる中国の官僚と異なり、藩の農工商の生活の安定と生産力の向上に力を注ぎ、その結果社会資本の蓄積が行われ、また蓄積の全国平均化が行われた。また職業の身分的編成により職業選択の自由を失ったが、家業を持ったことにより、世襲化、職業、技術への関心度、職業意識が進化した。一方中国では、均分相続によりそれが十分に形成されなかった。また皇帝は、全国の資財、人財を一カ所に集中し、動員して大規模な土木工事を行うことが可能であるが、これは巨大な浪費をし、国家を破滅させる危険を内包していたとし、これらの要因が遅れていた封建国家が、アジア国家を追い越す条件となったとしている。

このように中国史において封建制を含む継起的

生産様式の適用を拒んで、そのかわりにウィット・ホーゲルや滝村隆一氏の理論を援用しながら中国における専制主義を強調している。それについて気になる点があり、それは前述した中華帝国が世界帝国になるために、遊牧社会との関連を説明する文脈の中で述べられるのであるが、「純粹農業社会は、新王朝が誕生するや、農業生産の拡大、余剰部分の蓄積が急速に行われ、次いでそれを国家が権力機関の整備拡大や軍事力へ投下し、国家の基礎が確立すると新興支配階級の無制限の人民収奪が続き、最後には権力機構の肥大化、支配階級の腐敗、官僚層の反人民化が急速に進展し、それに抵抗する大民衆反乱が起こって、この王朝は没落して生命を終える」(下巻333頁)という認識は、戦前・戦中期のアジア的生産様式論と同じく停滞論になるのではないかという感をもつ。歴史の発展という点では、時代の進展に伴う生産力の発展に関連する分業の発展とか技術の進歩とかなどを強調すべきではないであろうか。特に王朝末期の反乱によって王朝が滅びるという指摘などは、循環論に陥るのではないかと思う。

その他に小林氏は、現在の中国を分析するに当たって、明清時代の地方官である知県の任期の「不久任制」と任地の「本籍地回避制」が、中華人民共和国時代にどのように変わったかという大変ユニークな分析をしながら毛沢東時代と鄧小平時代を比較している。毛沢東時代、県の書記・副書記は、華北・東北から南下工作団として華中・華南に進駐したものが大部分を占め、県長・副県長の場合は半分が他省人であり、彼らは学歴も大部分は小学校、初等中学校卒で、任地の県民の情況も言葉もわからず、党中央の命令をやみくもに実行し政治運動を行った。ところが80年代以後になると、書記・副書記、県長・副県長の過半数が同省人となり、90年代になると同県人となった。学歴も大部分が大卒となったが、彼ら同県人の官僚が特殊利益集団、縁故集団性を作り上げ、「官倒」

を行ったとしている(下巻第3部第7章)。使われた資料は公刊された県志であるが、専制国家以来の地方官が地元で縁故者と結びついたり、長く任地にいて利権を貪ることを起こさせないというシステムが中華人民共和国時代にどのように変質したかということに、現在の地方官僚の腐敗の原因を求めるという大変興味深い分析をしている。

気になることとして、明清時代「それら(拳棒結社、武術結社)は大刀会、小刀会などの武装結社として発展し」「こうした土壌の上に清代には」「天地会、哥老会等という広域的秘密結社が誕生した」(上巻379頁)と書かれているが、咸豊年間の上海小刀会、福建小刀会は、普通天地会の別名、あるいは天地会系統の結社とされているのではないだろうか。また天地会の創立に関しては、武装結社よりも佐々木正哉氏・蔡少卿氏が指摘しているような羅教の影響を重視すべきであると思う。

最後に、ある高名な中国近代史の先達が私に本書が出版される前に、小林氏の論文はもっと若い人に読まれるべきであると言ったことがあるが、私もその意見に賛成である。ただ本書は、小林氏も指摘しているように、執筆時の前後によって章ごとに矛盾している論点があり、小林氏はそれぞれ必要なところには補注をつけているが、私自身本書を通読してはじめて小林氏の現在の見解を理解できたのであり、もう少し論文の取捨選択をされるか、あるいは現在ではどう思われているかより明確にされると若い人にもわかりやすかったのではないかと思う。ともあれ小林氏が世界史的視野のもとで提出している多くの論点(本書評でも一部しか紹介できてないが)は、十分に検討する価値があると思う。

以上、小林氏の出された多様な論点をあるいは誤読、誤解している点もあるかと思う。その点は小林氏のご寛恕を願うものである。(2008年8月刊、上巻、529頁、下巻、547頁、各税込12,600円)